



岡本秋暉「百花百鳥図」(部分)  
江戸時代(19世紀) 摘水軒記念文化振興財団蔵

館長のつれづれコレクション案内

何かわからないかたちの魅力



伊藤若冲「寿老人・孔雀・菊図」

宝暦(1751- 64)中・後期 紙本墨画 3幅 各110.1×29.4cm

本作は来年開館30周年を迎える弊館が開館した1995年、辻惟雄館長時代に収蔵されています。弊館の初代館長でいらした辻惟雄氏はご著書『奇想の系譜』で伊藤若冲(1716-1800)や曾我蕭白(1730-81)などを紹介し、江戸絵画の評価に激変をもたらしました。

不老長寿をつかさどる寿老人を中幅に、菊と孔雀を左右に配していますが、独創性に富む若冲らしく、寿老人は後ろ姿、取り合わせる動物も、長寿のシンボルとして寿老人とともに描かれることの多い鹿や鶴ではなく孔雀となっています。孔雀も仏教に孔雀明王があるように、あらゆる毒や病を退けるとされ、寿老人が持つひょうたんに入っているという不老不死の霊薬と通じるものがあります。

三幅を並べた全体の構図は、孔雀図の左下から左上の孔雀の羽根に向かう弧と、菊図の右下から右上の花に向かう弧に、楕円を二つ重ねたような寿老人のからだのかたちが呼応するようになっている上、濃墨を地面に近い下方のモチーフに用いて重量感を表し、孔雀の羽根や菊花などの上方のモチーフには淡墨を多用して軽さを感じさせるなど、かたちの面白さと描かれている対象のある種のリアリティを伝えることの双方への洗練された意識が窺えます。

「若冲の鶏」「光起の鶉」「狙仙の猿」「秋暉の孔雀」と称されるように、若冲は鶏を描くことに優れ、鶏一羽を描いた作品と米一斗を交換する人が多かったことから、自ら斗米菴と号したとも言われます。数十羽の鶏を自宅で飼い、日ごろからよく観察して、活写したと伝えられています。一方、若冲の時代、孔雀は見世物などで実物を目にする機会はあったものの稀少な鳥だったようです。推古天皇時代に新

羅から献上されたのをはじめとして孔雀は大陸から時折もたらされ、つがいでも献上されることがあったものの、次世代育成が難しかったため、近世においても大陸からもたらされるものであったとされています。そのためか、本作の孔雀の羽根やうろこ状の足、目や嘴などには若冲の鶏に見られる写実に基づく描写が活かされています。一方で、この絵の魅力は写実性だけに支えられているわけではありません。

菊図には三輪の花が真上から見たように円形で描かれていますが、最上部と最下部の花の茎は見当たりません。地面から立ち上がるものも何を表しているのか不明です。けれども、濃墨を用いてダイナミックに描かれたそのかたちと、薄墨のはんなりした丸い花のバランスは絶妙です。菊図の全体的な形態は、孔雀のかたちと呼応して、鳥のようにも見えます。

寿老人の頭は筆を左下におろして右下に向かって弧を描き、からだは上から筆を入れて左上に向かって弧を描くことで表されています。寿老人は霊薬を入れたひょうたんを持つとされますが、本作では寿老人のからだ自体がひょうたん型のように見えます。また、孔雀図の左下方の濃墨で描かれたものも、何を表しているか不明ながら、素早い筆さばきを感じさせて絵にダイナミズムをもたらすとともに、細い脚に支えられた孔雀のからだの不安定感を払拭しています。

巧みな構図、大胆な筆さばきと、菊花の花弁や孔雀の羽根などに用いられた墨のにじみを活かした繊細な表現、そしてユーモア。若冲の水墨の魅力あふれる一点です。

【館長 山梨絵美子】



## 担当学芸員インタビュー

千葉市美術館の夏の企画展は「岡本秋暉 百花百鳥に挑んだ江戸の絵師 ―摘水軒コレクションを中心に」と「江戸絵画縦横無尽! 摘水軒コレクション名品展」の二本立てです。千葉市美術館で寄託を受ける「摘水軒コレクション」を中心に構成した両展覧会について、担当学芸員に聞きました。

[話し手:学芸員 松岡まり江]

—今回は企画展二本立て、どちらも摘水軒コレクションをもとにした展覧会です。まずは摘水軒コレクションについて教えてください。

摘水軒コレクションは、千葉県柏市にある、摘水軒記念文化振興財団がご所蔵のコレクションです。財団のルーツは、江戸時代に柏村の名主を務めた寺嶋家にさかのぼります。寺嶋家は、自らの居宅を「摘翠軒」と称し、文化サロンのような場として提供していました。そこには学者や知識人、絵師などの文化人が訪れていました。千葉市美術館では、縁あって長年多数のご寄託を受けており、それらの調査研究をもとに二つの展覧会を同時開催します。

—そのうち一本は、岡本秋暉展となっています。秋暉をメインに取り上げたのはなぜでしょうか。

摘水軒コレクションは、「肉筆浮世絵」「花鳥・動物画」「岡本秋暉」を収集の柱とされています。岡本秋暉(1807-62)は江戸時代後期の絵師で、40歳頃に柏の「摘翠軒」を訪れていたんですね。新築の時期に逗留して小襖や屏風を描いたと伝わります。そういった縁から、秋暉の作品を積極的に収集され、いまでは摘水軒記念文化振興財団は世界一の秋暉コレクションを擁しています。

はじめは展覧会の一部で秋暉を取り上げる予定でしたが、コレクションの柱ということで作品数も多く、一つの展覧会として独立させることにしました。最後に開催された岡本秋暉展から18年が経っており、その後、岡本家伝来の作品がまとまって東京国立博物館に収蔵されたこともあり、新見も盛り込んでご紹介したいと思っています。

—岡本秋暉はどのような絵師なのでしょう。

秋暉は彫金家・石黒家の次男として生まれ、南蘋派の絵師・大西圭齋に学び、20代から絵師として活躍していました。南蘋派は、1731年に長崎に渡来した清の絵師・沈南蘋に始まる流派で、写生的な花鳥画が特徴でした。秋暉は南蘋の来日から約100年が経過した孫世代にあたり、華麗な花鳥画、とくに孔雀を得意としました【図1】。また、同時期に活躍した渡辺華山や椿椿山とも交流をもっています。

—当時はどういった需要があって花鳥画が描かれていたのでしょうか。

花や鳥が綺麗だからということはもちろんあるのですが、鳥は吉祥の象徴でもあります。鳳凰や鶴など有名な縁起のいい鳥がいますよね。たとえば、波打ち際の岩のう上に鶴がいる図は「一品当朝」という画題で、出世をあらわしています。これは、中国では出世した文官が鶴の柄の着物を着るからなんです。意味がきっちりとおめでたいという点も、南蘋派が流行したひとつの理由です。

—鳥に重要な意味があったとは知りませんでした。

江戸中後期には博物学が盛んになります。空想上の鳥ではなく、実物の鳥がどのようなかを知り、説得力のある描写にすることも求められた時代なのではないかと思えます。秋暉も、実際に小鳥屋に通って写生をしていたという逸話が残っていますから、いろいろと重なり合っていたのでしょうね。鳥ばかりを描いた10m近い画卷は、ほとんど同じものが二つ現

# 岡本秋暉 百花百鳥に挑んだ江戸の絵師

—摘水軒コレクションを中心に



【図2】岡本秋暉《百花一瓶図》江戸時代(19世紀) 摘水軒記念文化振興財団蔵

【図1】岡本秋暉《白梅孔雀図》安政3年(1856) 摘水軒記念文化振興財団蔵

存しています。自分用か弟子用かわかりませんが、絵を描く際のネタ帳として使われていたようです。今回は二つを並べて展示するので、ぜひ見比べてみてほしいです。

—秋暉の作品を見ていると、どこか職人的な側面を感じます。

ただ、作品をよく見てみると、下書き線が残っていたり、塗りがはみ出していたりするんですよ。超完璧主義に見えるけれど、実はそうでもない。そこが逆に魅力的に感じました。

それから《百花一瓶図》【図2】にはトロロアオイが描かれていますが、トロロアオイには「秋葵」という別名があるんです。音読みすると「シュウキ」なので、秋暉はもしかしたら洒落を込めて描いていたのかもしれない。ほかの絵師との合作でも自分のモチーフとしてトロロアオイを描いていて、秋暉の人間性を垣間見て親しみを覚えましたね。

—もう一本の企画展は「名品選」となっていますが、どのような作品が出品されるのでしょうか。

4章立てで、第1章では肉筆浮世絵を約40点ご紹介いたします。菱川師宣から始まり、喜多川歌麿、鳥居清長、勝川春章、歌川広重、祇園井持と、肉筆浮世絵の美しさと展開を追える作品が勢揃いします。以降の3章は広く近世諸派の作品を紹介し、動物や鳥が多く出てきます。ユーモラスでかわいい動物や、武家の人々が好んだ勇敢な動物、神様を重ねた霊獣など多彩です。

—摘水軒コレクションの特徴を感じられる展示になりそうです。

村瀬太乙の鷺の絵をご出品いただくのですが、見てください、このへたウマ感【図3】。太乙は尾張の学者で、このような雰囲気のある作品が多いんです。摘水軒コレクションでは、絵師の有名無名を問わず収集を続けているそうで、収集までの瞬発力がコレクションの充実を支えていると感じますね。美術館や博物館では「おもしろいから」という動機では収集は難しいですが、個

人コレクションでは作品と出会った時の心のときめきが重要というか。系統立てて収集される作品もあれば、ときめいて収集される作品もあり、そういった個人コレクションならではの魅力を感じます。

—チラシやポスターのメインビジュアルとなっている岩佐又兵衛の《弄玉仙図》【図4】は、重要文化財に指定されていますね。

そうですね。千葉市美術館にご寄託いただいている作品で、当館唯一の重要文化財です。福井藩主から豪商に下賜されたいわゆる「金谷屏風」に貼られていたものが、いまは分かれて一幅になっています。弄玉という仙女が笙を吹くと鳳凰がやってくるという絵で、墨の表現が大変繊細です。ぜひ実物を見ていただきたい作品です。

—最後に、松岡さんイチオシの作品を教えてください。

私は《猫金魚花鳥図》【図5】が好きです。正直言って……かわいくない猫(笑)。ほかのモチーフもどこかおかしくて、鳥も金魚も作画が少し崩れています。でも、摘水軒コレクションならではの一点で、有名な絵師の作品ではないけれどこういった作品も網羅されているところに大きな意味があるんですよ。

摘水軒コレクションには、まだまだたくさんご紹介したい作品があります。今年の秋には富山県水墨美術館でも摘水軒コレクション展が開催される予定で、また違った構成で作品が展示されますので、こちらもチェックしてみてください。もちろん千葉市美術館へのご来館をお待ちしています。



【図5】無款《猫金魚花鳥図》江戸時代(18-19世紀) 摘水軒記念文化振興財団蔵



【図4】岩佐又兵衛《弄玉仙図》(重要文化財) 元和期(1615-24)頃 摘水軒記念文化振興財団蔵



【図3】村瀬太乙《鷺画》江戸時代(19世紀) 摘水軒記念文化振興財団蔵

江戸絵画縦横無尽! 摘水軒コレクション名品展





「つくりかけラボ15 | 齋藤名穂 空間をあむ 手ざわりハンティング Tactile Hunt Weaving Space」がはじまります!

## アーティストインタビュー

つくりかけラボ15では、建築家でデザイナーの齋藤名穂さんをお招きします。齋藤さんは、「建築空間を、五感や個人の空間の記憶を頼りにデザインする」をテーマに、建築設計から美術展覧会の会場デザイン、美術館・博物館の教育のためのツール制作に至るまで幅広く活動しています。6月12日からの開幕に先立ち、お話をうかがいました。

—「つくりかけラボ」のお誘いがきたとき、どのような感想を持ちましたか？

私は普段、デザイン・設計の仕事をしているので、ある問題に対してどういう回答ができるのか?という仕事をしています。でも「つくりかけラボ」は、「あなたはここで何をやりたい?」と私自身に聞いている。これは大きな違いだし、チャレンジだと思いました。過去にやった作家達の名前を見て、どの方も、等身大で試行錯誤をされていてとても共感できる人たち。そんな人たちと同じ場所でプロジェクトできるのは嬉しいなと思いました。

—タイトルに「手ざわりハンティング」というワードが入っていますが、プロジェクトはどのような内容になりそうですか？

千葉県美術館という建築空間や、作品が描く世界（それは今あなたが立っている美術館の空間とつながっている空間）を探索した中で出会った「手ざわり」を、つくりかけラボでプレートの上に作ることを「手ざわりハンティング」と呼ん

でいます。そうやって集まるたくさんの手ざわりを、ラボでは絵本（お話）にしたり、地図にしたりしようと思います。参加する皆さんが見つけたものをいろんな形で繋いでいくイメージです。

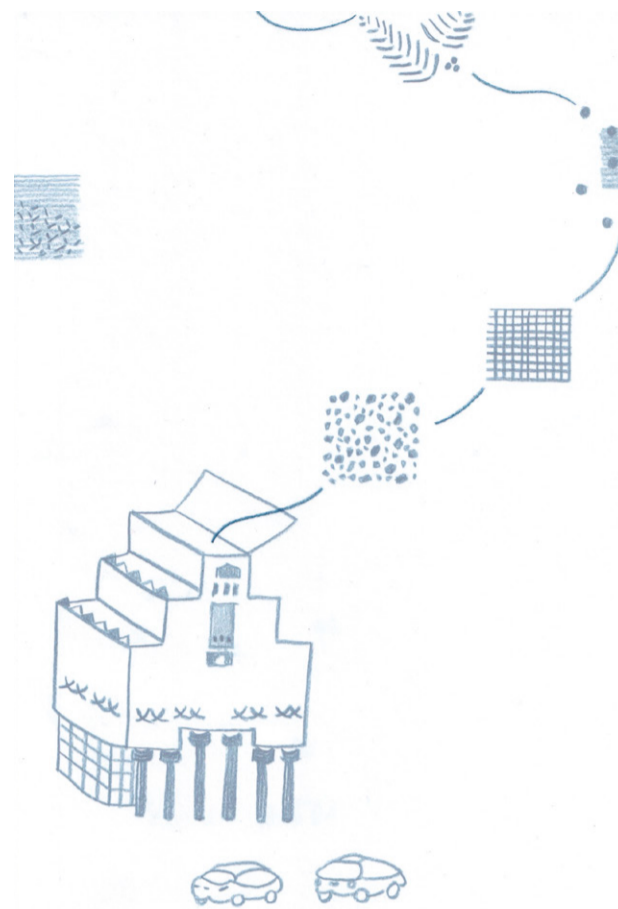
—今回のプロジェクトで取り組む内容はどのようなアイデアから生まれたのでしょうか？また、「さわる」と「地図」は齋藤さんにとってそれぞれどのような意味を持っているのでしょうか？

世界ではいろんなことが起きているけれど、それを自分ごととして実感する瞬間ってどんな時かな、と小さな頃から考えていました。「さわる」は、自分がいる空間を実感する瞬間なのではないかなと思います。「地図」は、空間についての絵本のようなもので、その場所にどんなお話が潜んでいるかを教えてくれるもの。探索のはじまりにもなるし、記録にもなると思います。

—このプロジェクトで挑戦してみたいことはありますか？

私は、美術館や博物館と一緒に「見えない人と見える人が一緒に読むさわる地図」を作ってきました。制作するときはたくさんの方が関わりますが、基本的には私が全体をデザインしています。今回つくりかけラボのお話をいただいた時、そのプロセスをひらいて、つくりかけラボと一緒で作ってみたいと思いました。大きな筋は考えているけれど、どんなものができるかわからない。これはととても大きな挑戦です。

—齋藤さんご自身が今回のプロジェクトでいちばん楽しみにしていることはなんですか？つくりかけラボでどんなものが生まれるかな、私が思いもつかないような自由な気持ちで作られたものに会えるといいなと思っています。空間を歩いて探検して、ハンティングしてきたものを手を使って制作し、絵本や地図を作ったりする。ゆったりとたくさん作りたくなる夏の時間になるといいなと思います。



長野県立美術館 ひらくツール photo:Hideki Ookura



長野県立美術館 ひらくツール photo:Hideki Ookura

つくりかけラボ15 | 齋藤名穂  
空間をあむ 手ざわりハンティング  
Tactile Hunt Weaving Space  
会期 2024年6月12日[水]-9月29日[日]  
休館日 7月1日[月]、8月5日[月]、  
9月2日[月]  
会場 4階子どもアトリエ  
入場料 無料



## あつまれ! つくらボ研究員

つくりかけラボ15プロジェクトメンバー大募集! / つくりかけラボの活動を一緒に盛り上げてくれる、つくりかけラボ研究員の方・研究員候補の方のご応募をお待ちしています!

活動が  
あつまれ!

STEP 01



アーティストの実験  
(ワークショップ)を  
一緒にたのしむ!

STEP 02



実験(ワークショップ)で  
たのしかったことを  
他の参加者へつたえる  
(ワークショップのサポートをする)

STEP 03



実験に参加していくと  
ブロンズ、シルバー、ゴールドの  
順にレベルアップ!  
君もゴールド研究員をめざそう

対象

- ・つくりかけラボ研究員の方
- ・つくりかけパスポートのスタンプを6個以上集めた有力候補の方
- ・25歳以下の方

詳細&ご応募はこちら



## 展覧会によせて

公益財団法人摘水軒記念文化振興財団 理事長 寺嶋哲生さんより、展覧会によせてコメントをいただきました。

### 〈コレクションのきっかけ〉

25年ほど前、子ども部屋を増築するために蔵を取り壊すことになり、蔵に眠っていた作品を引っ張り出したことをきっかけに、コレクションを始めてみようと思い立ちました。はじめは力を入れてやるつもりはなかったのですが、初期のころにたまたま北斎の《雪中鷲図》【図6】と出会い衝撃を受け、「これは本気でやろう」と決意しましたね。

### 〈摘水軒コレクションについて〉

北斎や若冲の作品に出会い、やはりいい絵を持たなければならないという気持ちになりました。しかし、いい絵は高額です。自分の資本力でいかにコレクションを形成できるか、長らく葛藤がありましたね。いまでは、有名な絵師のみならず無名の絵師もすくい上げるような合わせ技で、なんとか及第点に達したかと思っています。それを今回「縦横無尽」という言葉で表現していただいたことで、すごく救われたように感じました。

### 〈展覧会で楽しみにしていること〉

摘水軒コレクション展を開催すると聞いたときは、本当に光栄だと思いました。実を言うと、自分のコレクションをまとめて見る機会はあまりないので、財団の応接室の壁面にも、飾られてせいぜい3、4点ですから。美術館は広いので、絵の実力が見えますよね。並べてみるとまた違った見え方をするので心配や不安もありますが、私自身、展覧会をとても楽しみにしています。

岡本秋暉 百花百鳥に挑んだ江戸の絵師 — 摘水軒コレクションを中心に  
江戸絵画縦横無尽! 摘水軒コレクション名品展  
会期 2024年6月28日[金]-8月25日[日]  
前期:6月28日[金]-7月28日[日] 後期:7月30日[火]-8月25日[日]  
会場 8・7階 企画展示室  
休室日 7月1日[月]、8日[月]、29日[月]、8月5日[月] ※第1月曜日は全館休館  
詳細はホームページよりご覧ください



岡本秋暉展

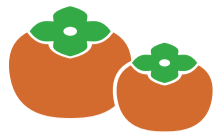


摘水軒コレクション名品展



【図6】葛飾北斎《雪中鷲図》天保14年(1843) 摘水軒記念文化振興財団蔵





時の蘇生・柿の木プロジェクト関連ワークショップ

# Piece of Peace 小さなタイルに願いをのせて

[2024年3月10日(日)、5月12日(日)開催]

講師に羽山加奈子さん(千葉市在住、陶芸家)をお招きし、11組22名の参加者とともに「自分の願い」をテーマに小さなタイルを2枚作成。1枚は自宅へ持ち帰り、もう1枚は2022年2月に千葉市美術館へ植樹された「被爆柿の木の2世」の根元に並べました。

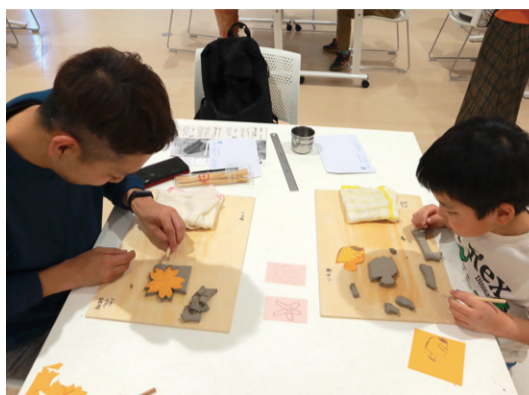
## 3月10日 ワークショップ 1日目



最初に皆で植樹された柿の木の見学へ行きました。早春の日差しの中、枝の先には小さな木の芽が!



小さなカードに、願い事や夢を思いのままに書き出していきます。講師の羽山さんも声をかけながら見守っていました。



願いのメモをヒントにタイルの形をイメージ。10cm四方厚さ1cmの粘土のプレートから切り出していく、自由に飾りもつけて成形しました。

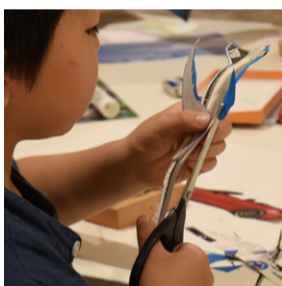


タイルは羽山さんに一度お預けし、釉薬がけや焼成などの作業を託します。タイルの完成を心待ちにしつつ、1日目は終了しました。

## 5月12日 ワークショップ 2日目



待ちに待ったタイルとの対面。幾つもの工程を経てから完成したタイルはツヤツヤと光り、それを見つめる参加者の目も輝いていました。



小さなタイルに込めた願いから、どんな未来や世界が広がっていったら嬉しいかな。さらにイメージを広げ、コラージュで表現していました。



この日は柿の木プロジェクト代表の宮島達男さん(現代美術家)も来館され、子どもたちの創作をサポートしてくださいました。



最後は柿の木の根元にタイルを並べ、皆で記念撮影。「タイルがまるで柿の木を見守ってくれているフェアリーのように」と宮島さんも仰ってくださいましたが、これから先ずっと、このタイルたち、そして参加者の皆さんと一緒に柿の木を見守っていききたいと思います。



当日の詳細



時の蘇生・柿の木プロジェクト

## 新しいスタッフをご紹介します!

千葉市美術館の学芸課に仲間が加わりました。これからどうぞよろしくお願いいたします!

①出身地  
群馬県伊勢崎市

②専門  
近世絵画史です。近世や近代の版画・版本にも興味があります。

③これまで担当した  
展覧会や企画など  
まだありません。これから頑張ります!



たべいしおり  
田部井菜里

④千葉市美術館の魅力はここ!  
展示室はもちろん、つくラボ、図書室、居酒屋さんまで、施設の機能が充実していることに加え、常設展も毎月展示替えを行っているの、いつでもどんな方でも美術に触れながら楽しめる場所です。

⑤千葉市美術館のコレクションでお気に入りの1点



吉田博《大原海岸》1928年：早朝の大原海岸を描いた作品です。微妙な色の変化により、海面に反射する日の光とそれに照らされてぼやける舟、岩々の影の濃淡が表されていて、画家の観察眼と表現力に圧倒されました。写真で捉えるのはきっと難しいであろう空気感までもが伝わる、とても魅力的な作品だと思います。

⑥これから千葉市美術館でやりたいこと

作品の背景、主に「どんな考えで描かれたのか」という点を大切に展示に携わっていきたいです。来館者の皆様が、作品から生きるヒントを得られるような展示を目指します。